

_____史学_____専攻_____領域（~~博士前期/修士・博士後期~~・前後期共通）

試験科目：第一~~外国語~~（~~_____~~）/~~_____~~ 専門科目（共通・選択）

試験時間：（120）分

【 共通問題（博士前期課程・博士後期課程 共通） 】

つぎの文章は、イギリス近代史を専門とする歴史家へのインタビュー記事である。これを読んで、あとの問1～3に答えなさい。

出典：長谷川貴彦「サッチャー改革という物語」『朝日新聞』2025年12月19日朝刊。
作問の都合上、省略等の改変をおこなっている。

- 問1 下線部㉑と関連して、研究の進展により特定の地域・時代の歴史的評価が大きく変わった例（問題文の事例は不可）を、歴史学内部の専門領域（例：日本古代史、西洋美術史等）を明記した上で、200字以内で具体的に説明しなさい。
- 問2 下線部㉒と関連して、問題文の例を除く任意の時代・地域における「前の時代の遺産」を、研究史を踏まえて300字以内で具体的に説明しなさい。
- 問3 下線部㉓に関して、上智大学大学院文学研究科史学専攻で自分が研究する学問分野における「長期的かつ構造的な視点」と「ミクロな視点」を、具体的な史料や方法論、先行研究等に触れつつ、300字以内で具体的に説明しなさい。

【 博士前期課程 選択問題 】 * 博士後期課程の受験者は解答しないこと。

以下の設問1～10のなかから1問を選択して解答しなさい。なお、解答の最初に、選択した設問の番号を明記すること。

《日本史》

1. 日本史上の文化「適用」の問題について、具体的な例をあげて論じなさい。
2. 江戸時代末期の天皇の誰か一人をとりあげて、その施策と世論について論じなさい。
3. 民俗学と歴史学には、a)学問の目的においても方法論においても、いくつかの大きな隔たりがある。同じ歴史事象を対象にしたとき、両者には当然のごとく b)課題や限界が生じるが、c)両者を補完的に用いることで、その克服を図ることは可能だろうか。何らかの歴史事象（心意伝承、生業、祭祀・祭礼など）の具体例を挙げ、a)～c)をそれぞれ明記して論述しなさい。

《東洋史》

4. 増淵龍夫の「任侠的習俗」に関する研究は中国古代の民間秩序に焦点を当てたもので、中国社会を理解する上で貴重な視点を提供している。榎山明は、任侠的習俗を取り上げることについて、「増淵の言葉を借りれば、習俗・心性は骨格に対する血と肉であるが、血と肉のみでは形を成さないこともまた確かなのである」と述べている。増淵や榎山が言う「骨格・血と肉」の関係について説明した上で、この指摘に対するあなたの考えを、具体例を列挙しつつ述べなさい。
5. ヌルハチの台頭から乾隆期に至るまでの清の変化の過程について、近年の清史研究の動向をふまえて、述べなさい。
6. 近年の日本における中国近現代史研究の中で、貴方がとくに魅力を感じたテーマや論点を具体的に紹介し、その理由を論じなさい。

《西洋史》

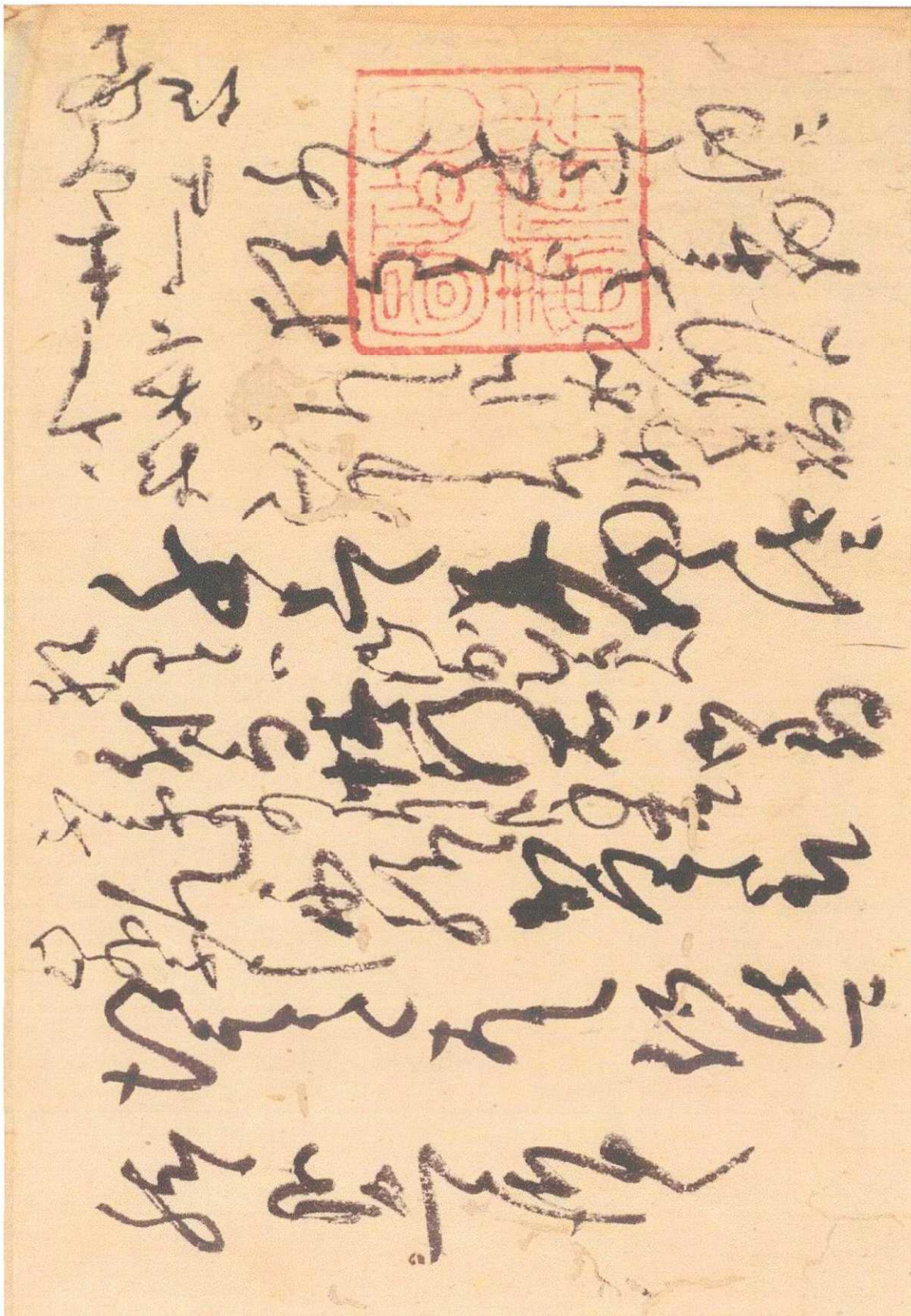
7. 西洋古代史研究における主要な論点として、ローマ皇帝と帝国の統合、ローマ国家とキリスト教の中から1つ選び説明しなさい。その上で、自身の研究がどのように位置づけられるのか、説明しなさい。
8. 紀元千年頃から16世紀までの西ヨーロッパの交易（遠隔地貿易）の推移を、取り引きされていた産物や地域、政治的要因・影響に着目しつつ説明しなさい。
9. フランス革命史について、フランスと日本の代表的な歴史家を挙げながら、これまでの先行研究をまとめ、現段階での研究上の課題と今後の展開の可能性を論じなさい。
10. 19世紀から20世紀初頭にかけての英独関係について、具体例を挙げながら、イギリス側の視点で論じなさい。

【 博士後期課程 選択問題 】 * 博士前期課程の受験者は解答しないこと。

以下の設問1～4のなかから1問を選択して解答しなさい。なお、解答の最初に、選択した設問の番号を明記すること。

1. 食の文化は、世界観や生命観、ジェンダー、聖／俗、人々の結合の仕方など、様々な社会的事象と結び付いており、料理のルールやタブーも、社会の構造を解明する手がかりになる場合がある。室町時代に武家の式正の料理として成立した本膳料理からは、社会のどのような構造を探ることができるだろうか。本膳料理に特徴的な調理法やルール・タブーなどを具体的にあげて、それらが室町・戦国期の社会のどのような構造や特質と結び付いているか論じなさい。

2. 近代以降の日本において、子どもや家族に関する規範はいかにしてつくられたか、またそうした規範にどのような問題があったと考えられるか、福祉や医学・医療の歴史における具体的な事例を挙げつつ論じなさい。
3. 簡牘史料は、20世紀初頭に中国西北辺境地域で本格的に発見されて以来、国内外の研究者から注目を集めてきた。とりわけ1980年代以降、発掘調査の進展によって出土件数が増加したことは、古代史研究の方法や視角、研究の「質」を大きく変化させる契機となった。簡牘史料の利用により古代史研究はどのように「変化」したのか、具体的事例をふまえて論じなさい。
4. 西洋古代史研究における主要な論点として、「ローマ化」論争について説明しなさい。その上で、自身のこれまでの研究がどのように位置づけられるのか、そして今後の自身の研究がどのように位置づけられる見通しなのか、それぞれ説明しなさい。



出典 文書A 蛭川家文書 第十八集二三二 吉田光慶書状(切紙)
文書B 蛭川家文書 第十八集二一九 松永久秀書状(折紙)

II 以下の文書を翻刻しなさい。漢字は現在の常用字体とし、適宜句読点を補い、判読不能文字は「=」と表記すること。

十一月一日(金) 晴

遂に十一月に立つた。それなのに今日の暖簾はどうしたのか。

十時に文部省の第一特別委員会又出の教育の機会均等を討議した。

Diamond社で印税一万円を売った。全く働いておる重た。十一時放送局で来る三日の為の憲法座談会又出た。文芸社で来る四日のための放送系府を去いた。三時五分帝口水産で講演。

六時前帰宅。夕食、自働車の仲間人と話した。

十一月二日(土) 曇り

朝、大阪新報記者、大滝山か両名、奥主一郎名つぎつぎ来訪。放送局に行つて四日に行はれる十五分の憲法講演をRecordした。

あはたぐいしいことである。

一時自由党の総務会又出席。党役員の方程をきめた。

二時半 亭島屋に2行入れる加藤、東谷両氏の結婚仲人として出席。午後五時半終了。Young coupleと自働車で帰宅。手紙の整理などしたの疲れを感じた。

十一月三日(日) 晴

別日記参照：今日は実に印象の深い日だった。

議会で陛下陛下御の下に公布の式
堂長は敬賀食卓で祝杯

午後二時宮城前の廣場で東条部
の都民祝賀大会。陛下は祝賀。

うして集まる市民の熱狂！ 素晴らしい日だった。

夕方、総理大臣で憲法関係者の夕
食。七時半帰宅。王使君夫妻、長
谷の三人と来て自分の慶賀会の
ラヂオをきいた。

十一月四日(月) 雨

十時の議長室で憲法精神普及
聯盟の委員会

正午、塩浜会を我善坊まで開く
鳩山一郎と松聖氏に夕方おりに
逢った。一時、日比谷公会堂に

行く。東条部主権の憲法記念演
講会。金森氏と私。私"主として

国民の権、我"と口会の話をしたの
火花して集壇をあげた。

雨の中を七時過ぎる帰宅

史学 専攻 領域（ 博士前期/修士 ~~・博士後期~~ ~~・前後期共通~~ ）

試験科目：第 ~~一~~ ~~外国語~~（ ） / 専門科目（ 専攻に関する小論文 ）

試験時間：（ 120 ）分

つぎの文章は、イギリス近代史を専門とする歴史家へのインタビュー記事である。これを読んで、あとの問1～3に答えなさい。

出典：長谷川貴彦「サッチャー改革という物語」『朝日新聞』2025年12月19日朝刊。
作問の都合上、省略等の改変をおこなっている。

- 問1 下線部㉑と関連して、研究の進展により特定の地域・時代の歴史的評価が大きく変わった例（問題文の事例は不可）を、歴史学内部の専門領域（例：日本古代史、西洋美術史等）を明記した上で、200字以内で具体的に説明しなさい。
- 問2 下線部㉒と関連して、問題文の例を除く任意の時代・地域における「前の時代の遺産」を、研究史を踏まえて300字以内で具体的に説明しなさい。
- 問3 下線部㉓に関して、上智大学大学院文学研究科史学専攻で自分が研究する学問分野における「長期的かつ構造的な視点」と「ミクロな視点」を、具体的な史料や方法論、先行研究等に触れつつ、300字以内で具体的に説明しなさい。

史学 専攻 領域（博士前期/修士・博士後期・前後期共通）

試験科目：第 1 外国語（ 英語 ） / 専門科目（ ）

試験時間：（ 60 ）分

以下の英文を日本語に訳しなさい。

Public history is about history in the public realm. It is “history *for* the public, *by* the public, *with* the public, *about* the public or *in* the public sphere.” But who is or who are “the public”?

What do we have in mind when we speak of history *for*, *by*, *with* or *about* the public? The various prepositions employed signal both the range of approaches adopted by public historians in their analyses and creations of representations of the past and raise a number of theoretical and methodological issues. Is the public (or are publics) passive consumers of the historical representations created by public historians? This is what history *for* the public implies. The public receives history curated in whatever form (books, exhibits, films, podcasts, walking-tours, etc.) by recognized (and certainly self-identified) authorities or experts who have been professionally trained as historians or in an allied field and are usually working in institutions (government departments, museums, universities, etc.). This is history in the public realm functioning as discipline and knowledge, where historical productions are generated for the public and which sees the public as needing information and instruction. This can take the form of official state narratives or, conversely, counter-narratives: both see publics as passive consumers of the historical representations that are produced.

To be sure, and particularly in the past few decades, such “top-down” public histories have involved varying degrees of public consultation. This can take place prior to the final production — often, to be rather cynical about it, designed to anticipate problems that might render the professional institution vulnerable to criticism — or afterward by way of evaluation and feedback to assist in shaping the next production. Representations — particularly those in museums and galleries, living history performances and reenactments — might even involve degrees of audience participation and interaction, but here too the public act as participants in representations firmly controlled and established by the professionals. The public may in such instances be active rather than passive consumers, but they are consumers, nonetheless.

Such a position is also implied in *talking of history about the public*. Here, the public serves as both the subject and object of the historical production in question. As in history *for* the public, the expert historian or specialist in an allied discipline or professional field is seen, by themselves and by others, as existing outside the public they are addressing. Indeed, these specialists claim that their training and experiences enable them to distance

themselves from both the past they seek to represent “objectively” and the public for whom their representations of the past are intended.

History *with* the public on the other hand recognizes that the public has a role to play in producing representations of the past. The preposition “with” suggests a moving away from the public playing the role of a consumer who might (if they are fortunate) be consulted or invited to participate, to one where they play a significant role in shaping historical representation. History *with* the public means that the public helps to shape the subject and nature of the production and to set the research agenda and is involved in the development and enactment process. The public works toward determining the storylines and narratives and is involved in strategies and technologies of representation and reception. Public histories in these instances are truly collaborative exercises, where the professional is just one contributor to the historical production and may not even play the most significant role in determining outcomes. Public historians in histories *with* the public often find themselves playing the role of facilitator and cheerleader, and this involves often complex processes of sharing and shared authority.

History *by* the public suggests histories that are created without the involvement of such professionals altogether — particularly professionally trained historians — or at the very least that they play a very supplementary role as sources (perhaps even as consultants) for historical representations initiated by others. This reverses the role of the public in histories *for* and *about* the public and firmly places experts as a constituent part of the public. To put it another way, this is “bottom-up” history, often generated outside official institutional structures, and they might be supportive of, or in harmony with, “top-down” histories or antagonistic and resistant to them.

Whether history is produced *for*, *about*, *with* or *by* the public, public historians tend to conceptualize the audiences of historical representations as a single, unitary public. This is captured in the phrase “the public,” sometimes qualified as “the general public,” or even the elitist phrase “the ordinary public,” which explicitly marks the public historian, and perhaps others — such as curators, filmmakers, and actors participating in the process of historical creation — as existing outside the public she or he has in mind. This is another frequent sense of the word: public history practitioners talk about needing to find “an audience” as if there is a public “out there” that somehow needs to be accessed.

_____ 史学 _____ 専攻 _____ 領域（ 博士前期/修士 博士後期 前後期共通 ）

試験科目：第 1 外国語（ フランス語 ） ~~専門科目（ _____ ）~~

試験時間：（ 60 ）分

以下のフランス語の文章を読んで、設問に答えなさい。

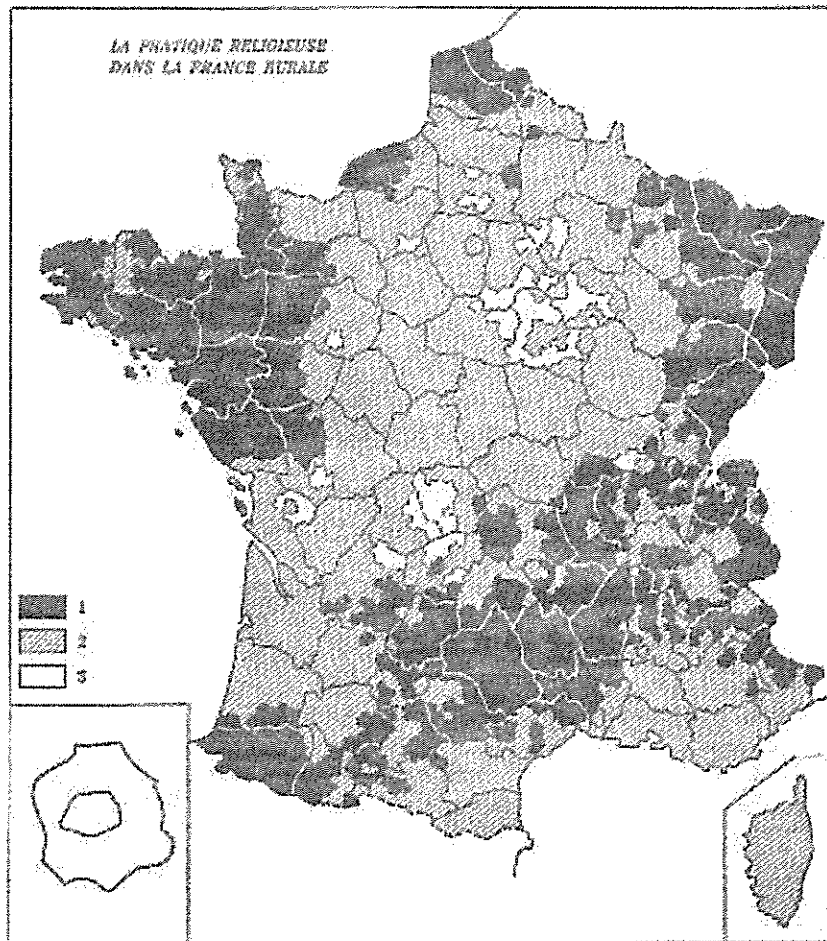
出典 : Article « Catholicisme », par Guillaume Cuchet dans: Eric Anceau (dir.), *Nouvelle histoire de France*, Paris: Passés composés, 2025, pp.399-401.

問 1 下線部(1)~(4)を日本語に訳しなさい。

問 2 下線部(A)について、日本語で説明しなさい。(字数自由)

〈問 3 は次ページに続く〉

問3 下線部 (B) の図版は以下のものである。この図版を読み解きながら、具体的な地域を取り上げて、この図版が示す傾向の歴史的背景を日本語で論じなさい。(字数自由)



LA PRATIQUE RELIGIEUSE DANS LA FRANCE RURALE
carte établie par le chanoine Boulard

1. Paroisses chrétiennes.
2. Paroisses indifférentes à traditions chrétiennes.
3. Pays de mission.

出典 : https://upload.wikimedia.org/wikipedia/commons/0/07/Carte_Boulard.png

史学 専攻 領域（博士前期/修士・博士後期・前後期共通）

試験科目：第 I 外国語（中国語） ~~専門科目（ ）~~

試験時間：（ 60 ）分

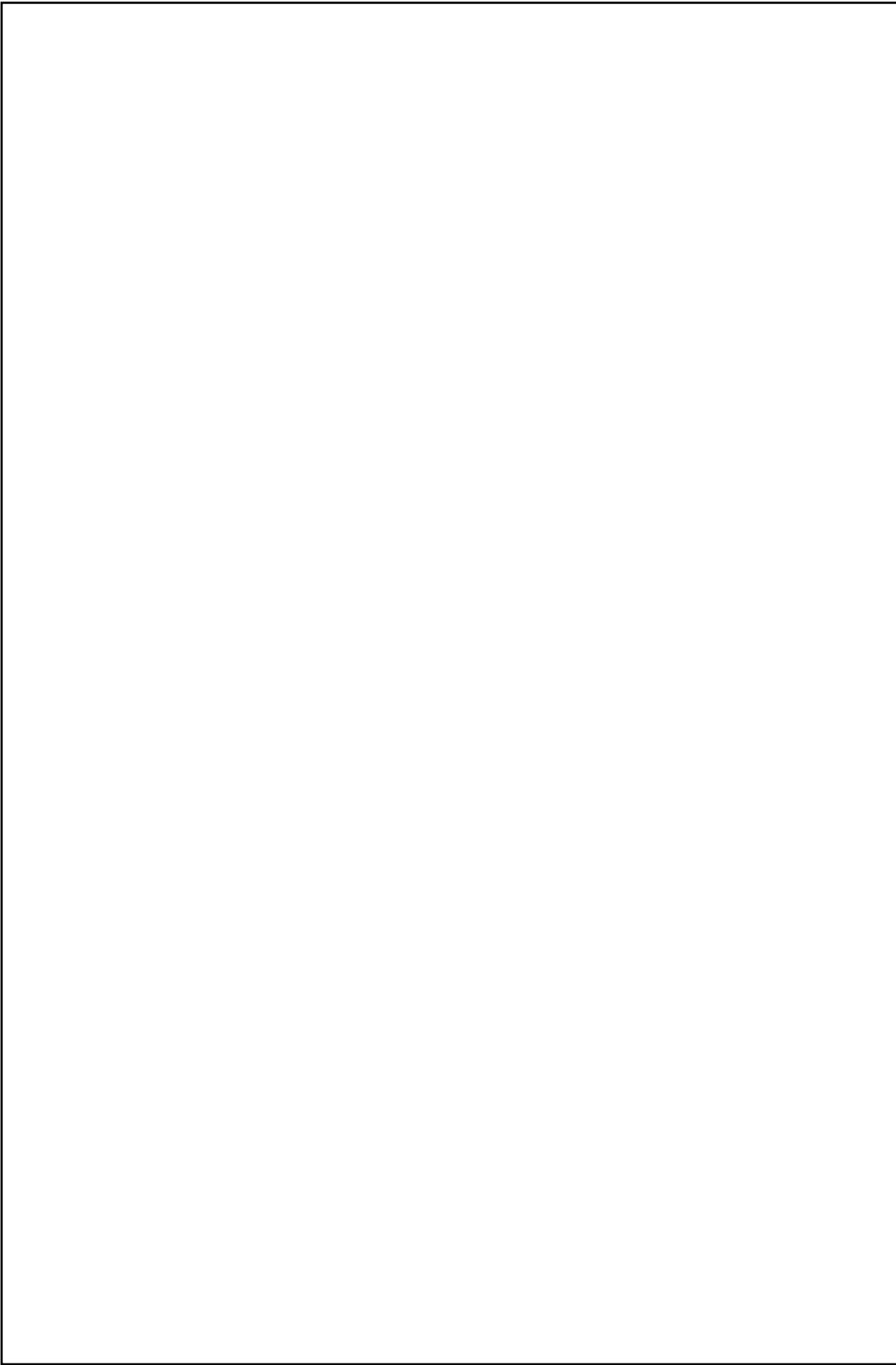
梁啓超『中国之武士道』を論じた文章を読み、以下の問いⅠ～Ⅲに答えなさい。

Ⅰ 下線部を和訳しなさい。

Ⅱ 全文を和訳しなさい。

Ⅲ 点線部について、本論文著者は「中国武士道精神的体现者」の特徴を

①国家、民族之大者②誠、義、孝、勇之大者③职守之大者④不辱身喪徳道尊嚴之大者に四大別していますが、各々の特徴を簡潔に説明しなさい。



(孫韜·張瑞潔「論中国之武士道—解讀梁啓超心中的中国武士」『武術文化研究』第7卷、第1期、2010年)